今、世界のピンホールは
小さな穴から世界へ

エリック・レナー&ナンシー・スペンサー
通訳　エドワード・レビンソン（PPAS会員）
林敏弘（PPAS理事）

紋別に来る機会を与えてくださった、宮川良一紋別市長、佐藤美術館館長、紋別市民の皆様、また、鈴鹿芳康氏、John Ashburne氏、ピンホール写真芸術学会の皆様、そして通訳してくださるEdward Levinson氏、林敏弘氏に深く感謝いたします。

私たちの住むニューメキシコは、アメリカ南西部に位置する砂漠地帯です。City of Rocks（岩の街）があり、北部の山岳地帯にはGila Cliff Dwellings（ギラの崖の家）が残っています。Mimbres（ミンバー）と呼ばれる先住民が建てた家です（写真1）。

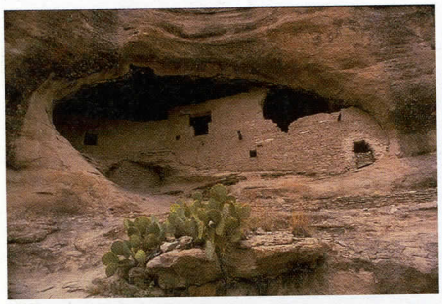


写真1

ミンバーは、およそ西暦1000年に起源をもつ民族です。彼らは独特なスタイルの陶器の壺を創りました。それらの多くは墓地から発見されています。壺には穴が開いており、死者の顔の上に置かれていました。おそらく、壺の穴から死者の魂が解放されると考えられたのでしょう。写真2は壺に描かれた絵です。一つは大きな角を持つ羊が描かれ、もう一方はバスケットの中に鹿を入れて運んでいるハンターを描いています。これらの絵はミンバー芸術を代表するものです。

写真2

人びとは古来から自分たちのメッセージを表現してきました。それらはさまざまな様式の芸術になっています。これからいくつかの時代に撮影されたピンホール写真の作品を紹介します。時代によってさまざまな手法、視点で作品が創られました。しかし、どの時代、どのような手法の作品においても、アーティストのメッセージが込められています。何をどのようなピンホールカメラで撮影し、何を表現しているのかを多くの作品から感じとってください。

建物（型）ピンホールカメラ

まず最初は建物型ピンホールカメラです。写真3は1997年にイギリスのNilu　Izadiが造ったカメラオブスキュラ（camera obscura）（注1）です。Darkened Room（暗室）とも呼ばれるカメラオブスキュラには六つの穴があります。

写真3

写真4-1（上）、4-2（下）

写真4-1、4-2の画像は、フィンランドのMarja　Pirilaの作品です。ピンホール画像を作るための小さな穴だけを残し、

エリック・レナーとナンシー・スペンサーは、共同で非営利の「ピンホール・リソース」を運営している。「ピンホール・リソース」は、ピンホール写真の情報共有を目的とする、ピンホール写真の保管および教育の機関。二人は、1985年から2006年まで「ピンホール・ジャーナル」を共同で編集していた。現在は、世界中で講義やワークショップを行っている。二人の写真は、世界中で展示され、ニューヨーク近代美術館、カリフォルニア写真美術館、カナダ国立美術館、ジョージ・イーストマン・ハウス、フランス国立図書館など多数の美術館に収められている。
スペンサーの著書：『アンダー・ザ・ブルー』（2008年フライング・モンキー・プレス）、『フライト』（レベッカ・ワックラーと共著、2008年フライング・モンキー・プレス）。レナーの著書：『ピンホール写真：歴史的技術の再発見』（1995年フォーカル・プレス、2008年第四版発行）、『アメリカのいつわり』（2007年フライング・モンキー・プレス）

寝室の窓をすべて暗幕で覆い、撮影しました。壁に写ったベッドに横たわる人と、家の外の道や建物の画像が上下逆さになっています。

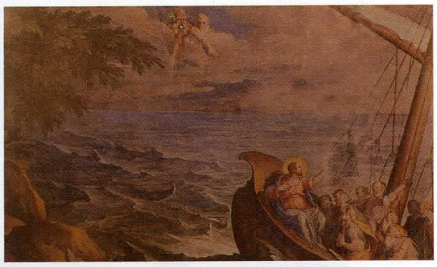
写真4-2は、写真を上下逆さにしたものです。この画像はより分かりやすいでしょう。このように建物や広い部屋でも、小さな箱でも、何でもカメラに作り変えることができます。

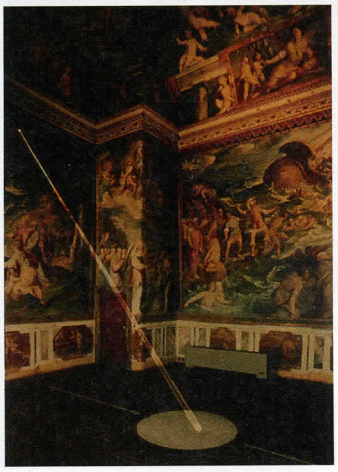
ピンホール写真の変遷

ではピンホール写真の歴史を追って、作品を見てみましょう。

写真5-1は、ローマのバチカンにあるTower of Winds（風の塔）です。風の神の口にピンホールがあります。1580年に天文学者らが、カレンダーが10日ほどずれていることを示すためにピンホールを設けたものです。穴は床に太陽のピンホール像を投じます。日時計なのです（写真5-2）。

この実演と天文学者の説明をうけた教皇グレゴリウスは、カレンダーをユリウス暦から現在使われているグレゴリオ暦に替えたとされています。





↑写真5-1
←写真5-2

市販ピンホールカメラの登場

数百年飛んで、ピンホールカメラが写真に使われ始めた1880年代に話を移しましょう。

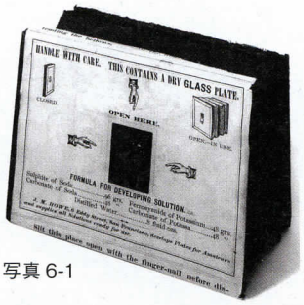
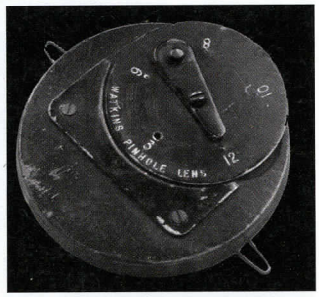


写真6-1

写真6-2

写真7



ピンホールは1890年代に広く使われ、たくさんのピンホールカメラが市販されました。写真6-1は、初代使い捨てカメラです。前面にピンホールがあり、背面にガラス板と小さな蛇腹があります。画像を撮った後、背面のガラス板は保存され、その他の部分は捨てられました。

写真6-2は、1888年のアンソニーピンホールカメラです。これには、蛇腹のほかに異なる焦点距離で柔らかさや鋭さをだすための三つのピンホールがある回転タレットがついています。

写真7のタレットは、ワトキンズピンホール“レンズ”です。「3」と貼られた大きな穴は覗くためのピンホールです。

アートになったピンホール写真

19世紀は多様なピンホールカメラが作られましたが、1920年から1960年代後半にかけて、ピンホール写真はアートの世界において人気がなくなりました。次にピンホール写真がアートとして復活したのは、1968年以降です。

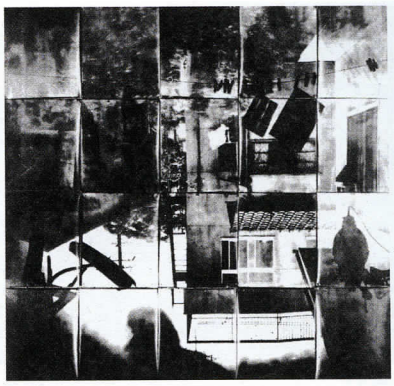


写真8

次からの作品はピンホールカメラが復活してから現在にいたるまでのものです。写真のメッセージ性に注目してください。

写真8はカメラオブスキュラで、20枚の印画紙に撮られたものです。1973年に日本のヤマナカ・ノブオが撮影しました。彼は34歳の若さで亡くなりましたが、初期のカメラオブスキュラで撮影した作品はよく知られています。

写真9-1は、イタリアのPaolo Gioliの作品です。手にフィルムを持ち、握りこぶしを作り、カメラとして使いました。写真9-2は、握りこぶしを使った、もう

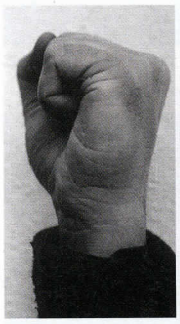


写真9-1

写真9-2

写真10

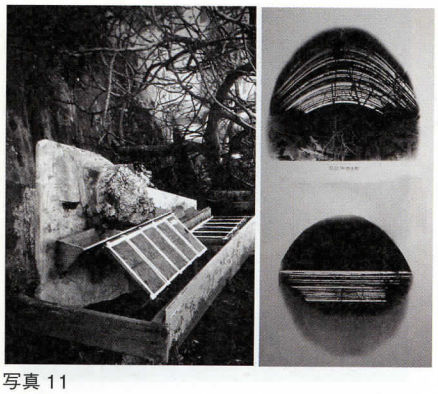


写真 11

一枚の自画像です。握りこぶしのカメラは、権力に対する風刺です。

写真 10 は、イタリアに住むベルギー人 Dominique Stroobant の作品です。彼は 1 日中、空を横切る太陽を撮影しました。大木を横切る太陽が光の筋として写っています。その後、彼は 6 ヵ月間、空を横切る太陽を撮影しました。写真 11 の左は、ずらりと並んだカメラです。右は、そのピンホール画像です。光の筋は 6 ヵ月間の空を横切っている太陽です。素晴らしいことに、彼は、時間と空の両方を写し込んだのです。

写真 12 はアメリカの Willie Anne Wright が、ナンシーを撮影したものです。5 分間の露出で撮影されました。この写真が撮られていた間、ビーチには歩いている人がたくさんいましたが、とても長い露出時間だったので、その人たちは写真に写らず、ナンシーと風にゆれる洋服だけが写っています。

写真 12

写真 13-1 のペーパーネガ画像は、エリックがピンホールから約 1/8 インチ（約 0.318 センチ）離して、透き通った被写体をはり付け、日向にカメラを置き、被写体を通して光を照らし撮影したものです。元のサイズの約 50 倍になった蛾（luna moth）の羽の眼状斑点です。写真 13-2 は貝殻です。

写真 13-1

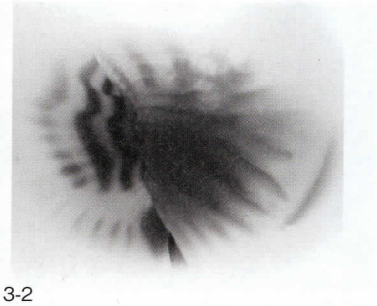
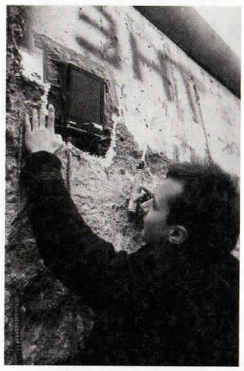


写真 13-2

メッセージを伝える手段として

1989 年にベルリンの壁が崩壊された時、ドイツの Marcus Kaiser は、壁の両側の穴にフィルムホルダーとピンホールを設置しました（写真 15-1、15-2）。



↑写真 15-1
←写真 15-2

写真 16-1

写真 16-2

写真 16-1 は、東ベルリンにカメラを向けて撮影したもので、写真 16-2 は東西のベルリンはもはや分断された場所ではないというメッセージを込めて、西ベルリンに向けて撮影したものです。

写真 17-1 は、フランスの Ilan Wolff が所有するピンホールカメラオブスキュラのトラックです。ピンホールはトラックの後方に造られています。

Place de la Bastille（写真 17-2）は、トラックで撮られた 9 フィート（約 2.74 メートル）の高さの写真です。彼の体の実物大のフォトグラム（影絵写真）を含んでいます。フォトグラムは、被写体を感光紙の上に置き、光を露出して撮られました。光を通さない被写体は完全に光をブロックし、被写体の輪郭を残します。半透明の被写体はある程度光をブロックしますが、背景をうっすらと写し込みます。

写真 17-1

写真 17-2

写真 18、19 は、1985 年に、エリックが造った石膏型のピンホールカメラです。顔の石膏型をとり、右目にピンホールを空けました。石膏顔カメラは、日暮れを撮影するために使いました。ダイレクトポジカラーの印画紙の上に顔をのせ、約 5 分の露出で撮影しています。

写真 27

写真 28

写真 27・28 の 2 枚のゾーンプレート画像は、ニューメキシコの私たちの家の近くの温泉プールで横たわっている、娘ベスを撮った作品です。

古来からプールは癒しの場所と考えられていました。伝説では、敵対する先住民たちは、武器を置き、温泉プールに一緒に入ったと言われています。これらの写真は、娘とナンシーのギクシャクした関係が回復した時に撮りました。私のねらいは、癒しの感覚を伝えることでした。

スリット写真

次はスリット（隙間）写真です。

スリットカメラは、いろいろな形の中のにある二つの隙間を使います。隙間は 2 インチ（約 5.08 センチ）離され、フィルムは 2 インチ後ろに設置されます。

写真 29-1 は、アメリカの故 Marnie Cardozo がデザインしたカメラです。写真 29-2 はそのカメラで撮影した作品です。

写真 29-1

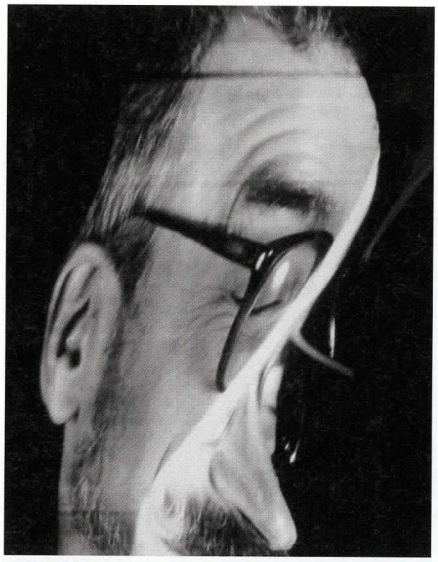


写真 29-2

写真 30

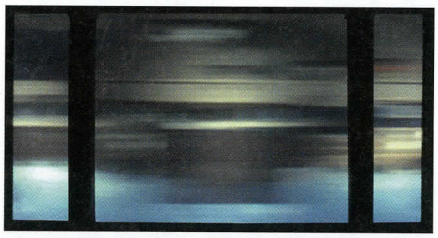


写真 31

アメリカの Harry Littell は、高速道路を見渡せる建物にある、たくさんの窓に隙間を作りました（写真 30）。

写真 31 は、一つの隙間から撮影された上下逆の画像です。画像の上部に、高速道路を走る車が見えます。

デジタルピンホール写真

デジタルカメラをピンホールカメラとして活用することもできます。デジタルカメラのレンズを取り除き、代わりにゾーンプレートあるいは、ピンホールかのどちらかを、ボディキャップに設置します。

次の 3 枚のゾーンプレート画像は、ナンシーが小型のデジタル一眼レフカメラ・ニコン D50 で撮影したものです。

アメリカと中国を旅したときの風景です。

木々のシルエットがやわらかな色合いで表現されています。空と山の稜線が溶け込むように混じり合う作品（中央）もとてもやさいい印象です。

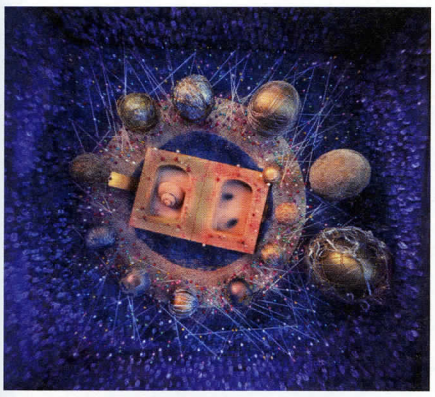
これらは、やわらかさや混ざり合う色のある写真を撮るために、意図的にカメラを動かして撮影しています。

私（エレック）は、リアリスティックな写真を作りたいとは考えていません。むしろ、そこにあるものを超越していくような写真を作りたいと思っています。

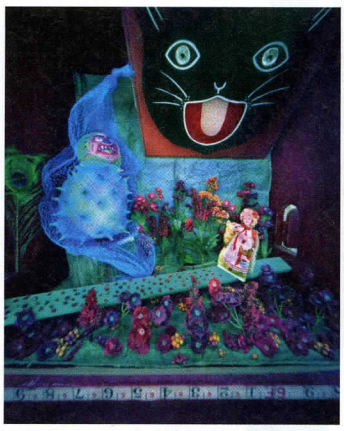
私（ナンシー）はピンホールのイメージを初めて見たとき「このように世界を見たかったのだ」と感じました。ピンホール写真はアニミズムにとても近いと思っています。多様な技術と被写体の選び方で多様な作品が生まれます。皆様のこれからの作品作りに期待しています。ご静聴ありがとうございました。

最後の連作は、私たちの合作 On Deaf Ears（聞こえない耳で）です。

注 1　カメラ・オブスクラともいう。

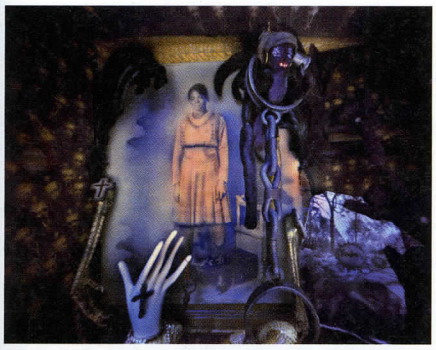


“13 Moons（13個の月）”

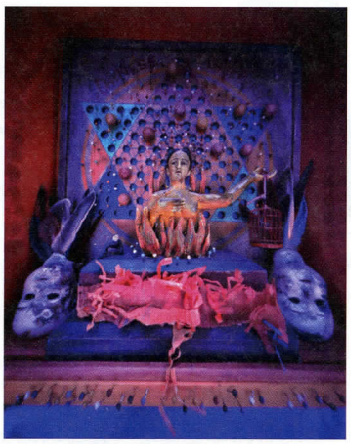


“Walking the Straight and Narrow（まっとうな生き方を歩む）” という作品。

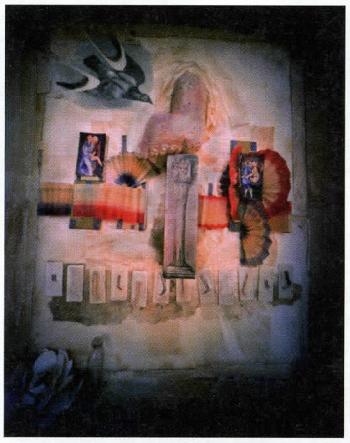
“Ticket to Aushwitz（アウシュビッツへの切符）”



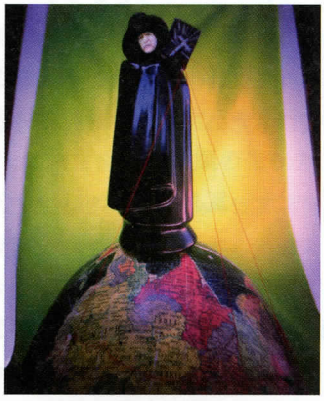
“White Hand（白い手）” はアメリカの奴隷制度の歴史をテーマにした作品です。



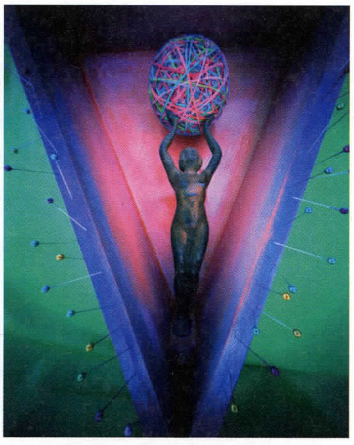
“A Woman Should Never Leave Home without Her Marbles（女性は理性を失って家を出るべきでない）”



“Chinese Beauty Puzzle（中国美人のパズル）” 列の一番上にあるのは、かつて中国で、纏足した女性のための作られた靴型です。



“Axis of Evil（悪の枢軸）” はジョージ　ブッシュのコメントです。



“Universal Woman Holding Rubberband Ball, 2 Years in the Making（作るのに2年かかった、ゴムバンドボールを持つユニバーサルウーマン）”

そして最後は “End of the World（世界の終わり）” です。